

[遺族] 中江 龍生 氏（平成 24 年（当時 27 歳）、妹を交通事故で失う）

[要旨]

○当時の状況

今から 10 年程前の平成 24（2012）年 4 月 23 日、集団登校の列に車が突っ込み、当時 26 歳の妹とお腹の中にいた 7 か月の赤ちゃんも一緒に亡くなりました。加害者は当時 18 歳の未成年で、無免許運転の少年だったこともあり、事件は大きく報道されました。

この事件は危険運転致死傷罪に問うことができず、私達は妹を失っただけでなく、法律にも苦しめられるという二次被害に遭いました。

私達は、ここにおられる被害者支援の関係者の方々や署名活動に御協力いただいた方々など、たくさんの人に支えられて、今日まで来ることができました。

○活動をする中で一周目の状況と心情

当時、私は社会人でしたが、多くのメディアにも出ており、父と共に行動することが多くありました。仕事がままならなくなることもありましたが、こんな微力な私でも、何か変えることができるのではないかという思いで活動に参加していました。

しかし家に帰ると、生活にすっぽり穴が空いたようで、「これが現実じゃなくて夢ならいいのに」と何度も思いました。活動している時は無我夢中なのですが、ふと我に返ると、「なぜ自分はこんなことをしているのだろう」と考え、虚しく、とても悲しい気持ちになりました。

当時を振り返ると自分のプライベートはなく、事件前までの友人とも距離を置くことが多くなりました。近所からは、「そんな活動をして何か意味があるのか」「お金が欲しくてやっているんじゃないか」などと言われ、指をさされたり、スマホで写真を撮られることもあり、家から出るのがすごく嫌でした。それだけではなく、ネットでは言われのないことも多く書かれ、名前を挙げられることもあり、ネットを開くことさえもつらかったです。「自分は妹を亡くしてつらい思いをしているのに、なぜ、こんな目に遭わなくてはいけないのか」「活動することはいけないことなのか」という思いになることもありました。

そのような時、自分の周りには、理解してくれる人も相談する相手もいませんでした。

また、父はすごく積極的に行動する人でしたので、父と共にいる中で多くの人とも出会いました。でも私は、どこまでいっても「父の息子」という印象が強く、「お父さん、すごく頑張ってる人だから、支えてあげて」という声がとても多くありました。もちろん、「私は父の補助であって、出しゃばりすぎちゃいけない」と考えていたので、陰で父を支えようと必死でした。でも、活動をするうちに、「私の立場は何なんだろう」と考えることが増えてきて、「私のことを支えてくれる人は誰なんだろう」と、とても悲しい気持ちになりました。

○同じ境遇にある人同士で話ができる場所が必要

本日のような話をする機会があっても、親の前ではあまり話はできなかったですし、きよ

うだいの立場で訪れることもあまりありませんでしたが、活動をする中で、兄弟姉妹と会う機会は多くなってきました。そこには、私と同世代の兄弟姉妹を亡くした人が多くいました。

その出会いをきっかけに、兄弟姉妹だけで話ができる場所があることを知りました。そこでは、これまで話せなかったこともたくさん話をするのができ、共感したり、気持ちを共有することができました。自分の家族でもなくパートナーでもなく、自分と同じ境遇にある人として、このような気持ちは分かち合えないのかなと思います。

この集まりで出会う皆さんは、「これまで何度も探したけれど、ネット上にも公共の場にもこんな場所はなかった」とおっしゃっていました。それを聞いて、自分の気持ちを身体に閉じ込めて、話ができなかった人が多くいると思いました。

私は交通事件で妹を亡くしていますが、兄弟姉妹を自殺で亡くした方もいますし、病気で亡くした方もいます。でも、どんな事案であっても、抱えている気持ちは同じで、自分の親にも友人にも話ができないという人が多くいました。私の気持ちは当時と今と何も変わることはないのですが、私がそう思っているということにも目を向けてもらいたいと思います。

今日お話しできたことが私の気持ちの全てではないですし、私の気持ちだけが兄弟姉妹の気持ちではないですが、このような気持ちもあるということを知ってもらうきっかけになればよいと思います。

私は以前、大阪にある兄弟姉妹の会に参加していたのですが、現在は他県にいるため参加できていません。ですので、今日のような場をきっかけに、全国的に兄弟姉妹が話し合える場所が増えればよいと思います。